を營みしも、先代の歿すると共に醸造の業を廢す。當主嘉广氏はその長男として明治元年十月十三日出生、幼時寺子屋に學を受け、その後小學校に學ぶ。さらに東上して、下谷區練塀町島田重禮氏の私塾に入りて漢籍を修め、後進んで明治法律學校に入學、明治二十三年學なりて歸郷、現夫人を迎へ、家政を見る。聲望漸く加はり、村會議員、郡會議員、縣會議員、村長等に選ばれ、郡會に於ては議長となり、縣會に於ては、參事會員に擧げられ、手腕の人を以て稱さる。その村長在任當時は、明治四十年の大水害後のこと故、經濟產業上に於て、緊急を要するもの、實に山積する多忙時なりき。先づ花咲宿裏堤防外一ヶ所の施設に着手し、これが完成には、私財數千圓をも惜しみなく投じて完成を見るに至る。次いで當時の東小學校の建築にも奔走するなど、功を推して擧村民の畏敬する所なりき。今閑地にあれど、功昔を語り、村内は勿論縣下の令名を馳せて光つてゐる。趣味としては圍碁であるうら子夫人との間に五男あり、長男政照氏家にあり、次男禧氏東京電燈會社に勤務、三男を雲平氏といひ、四男平太郎氏は京都帝國大學農林學部在學、五男清治氏大阪市民病院に勤務中である。

小兒科加藤醫院長
縣會議員、町會議員
前郡會議員、前郡會議長

加藤鐵之助

北都留郡上野原町
仲町三二四一
電話二八番

加藤家は、武將武田公の家臣、加藤丹後守の末裔を汲む帶刀の家柄にして、この地屈指の舊家で、家系連綿今日に及び、家古くより農を業とし、今尙ほ地方指折りの大地主を以て知らる。先代友吉氏は町總代、或は議員等の各公職に歷任し、地方自治界の功勞者たりしが、七十七を以て物故。當主鐵之助氏はその長男として、明治元年七月八日出生、甲府中學校の前身、徽典館を卒業、その後醫を志して上京、千葉醫學校に入りて學ぶ。業成るや、駐まりて母校に臨床の學を修む。數年後、練磨されたる技を携へて神戸病院に赴任、良醫の名を高くす。明治二十六年郷里にかへり、加藤醫院を開業、一般の診療事務に當り、名醫として信頼を受け、今日に至る。時に小兒科に於ては、他の追隨を許さずといふ。聲望日に昂り、明治四十年町會議員に選ばれ、爾來今日迄現任、斯界の中堅たり。この外助役、郡會議員、參事會員としても選を受け、郡政當時は議長として鳴らしたものである。當時の才腕いまや縣會に遷し、腕利きの議員として囑目されてゐる。趣味としては書畫、うめ子夫人との間に三男一女あり、長男達也氏は、中央大學を出で、現に東京瓦斯會社に勤務、次男得中氏は、東京大森町に開業中にして夫人また女子醫專出の醫師にして、精養病院に勤務中、三男鐵夫氏は、明治大學政治經濟科在學中、長女梅子孃は初狩村の素封家三枝家に嫁す。

郡醫師會理事、梁川村醫、校醫
黑部醫院長

黑部侑伎

北都留郡富士村鳥澤

黑部家は醫業九代、郷黨の間に著聞した名家で、先代黑部勇氏は內外科の名手として敬仰された。慶應二年八月五日を以て生れ、醫學を東京濟生學舍に學び、明治二十四年、醫術開業試驗に登第した其の後、順天堂醫院、または山龍堂病院に研究して、尋いで山梨縣立病院に勤務し、監獄醫、縣檢定醫を兼ねた。明治二十七年現在の地に黑部醫院を開き、內科及び外科を專門として、診治に當り、起死回生の妙腕ありと稱せられ、托生の恩人として讃へられた。傍ら村醫、校醫を囑託せられ、社會衛生にも、また幾多の業績を上げた其の私的生活趣味性に富み、常に讀書に園藝に親しんだが、數年前逝去せられた。當主侑俊氏は其の長男で、明治二十八年十二月二十一日の出生。父祖の血を承けて頴悟、夙に東京醫學專門學校に學び大正十二年卒業後、順天堂醫院に入り、外科の研究に專念精進し、其の後東都に留り、丸の內海上ビルに門戶を經營したが、昭和六年郷里に歸つて、先代の遺業を繼承した。現在は梁川村の村醫を囑託せられ、また郡醫師會理事を勤めてゐる。氏は頗る仁慈の心に厚く、常に恒產なき者のため、利害を超越して、醫師たるの責を果してゐる。因に、靜子夫人との間に二男一女がある。

郷社

中倉神社

社司 中村資生

北都留郡上ノ原町
仲新町一六〇二

當社の創建は、相當古きに屬するものゝ如くなるも、古文獻の明に傳ふるものなきを以て、その詳細を盡し得ざるを憾みとす。されど藏されてゐる永承年間に屬する木像二軀と鐵造物の鏡面等より見れば、尠くとも、その前後に創建されたるものと思惟せらる、この外、寶物としては、日清、日露の戰利品などが數多ある。しかして拜殿、神樂殿等の今日存する主要社殿は、明治十四年に改築されたものである。毎年九月二日を以て例祭日となし、殷賑を極む。氏子範圍は近郷一圓にして、その數多し。歷代神職小佐野照風——小佐野耕——中村壽命——中村資生の四氏である。

社司 中村資生——先代中村壽命氏の教養の下に人と爲り、篤實な神官として氏子の信頼を受けてゐる中村資生氏は、明治二十六年五月二十五日を以て生る。長じて東京に出で、水道橋御崎神社に仕へて修業、その後白山神社にも仕ふ。大正十五年郷里に戻り、先代につぎて神に仕ふ。爾來誠意もて神の道に精進し、且つ一般敬神崇祖の念向上涵養に資せんがために、小學兒童を以て組織せる少年團をして毎朝の禮拜を取行ひ、爾來この行事を續行して、益々信念の向上と進展をはかりつゝ今日に及んでゐる。

學務委員
四方津郵便局長

加藤謙

北都留郡鹿村四方津
電話四方津一番

加藤家は四方津部落に於ける草創の舊家で二十數代を閱し、舊幕時代は代々名主に推されてゐた。明治の御代となつて祖父は戶長を勤め續いて村長となり、大いに村治の建設に獻替し、八十九歲の天壽を完うした。先代籠吉氏は、壯年にして東都により、一生を實業家として終始した。當主の謙氏は其の長男で、明治二十八年十二月二十四日に出生。大正四年早稻田大學商科を卒業し、後輜重兵第一大隊に入營し、大正六年十二月除隊して歸り、村の在郷軍人分會長に推されて一期を勤めた。同十二年四方津郵便局長となりてより、爾來今日に及んでゐる。同郵便局は、明治二十四年加藤貞五郎氏の創設したもので、村の心臟的な役割を有し、從て局長に學識人格ある士を要することは云ふまでもないことで、氏は其の好適者たることを、過去十年間に示して來た。尙ほ、學務委員を兼ね、地方教育の改善發達に鋭意努力してゐる。年齡未だ不惑に達せず意氣と熱に富み、且つ實力ある、氏の前途は大いに刮目すべきだ。因に、令閨壽美子氏との間に、元治君（都留中學校在學）唯一君、和男君、育男君、玉子孃（都留高女在學）千惠子孃、昭子孃、良子孃の四男四女をあけ、一家頗る圓滿である。

七保郵便局長、從七位勳八等
前村會議員

鈴木重治

北都留郡七保村
葛野二三七四ノ一

鈴木家は、寛文年間既に檢地役をも勤めたる程で、本村に於ける最も古き家柄である。その後幕政の時代には代々名主を勤め、苗字帶刀を許されたる家柄で、世人當家を鈴に表と號し、歲を閱するに及び、自然表なる名は鈴木家の屋號と化すに至る。先代仁兵衛氏の時迄は、仁兵衛を襲名し、地主として知らる。今日に於ても、村二位の村稅を負擔してゐる。先代仁兵衛氏は、先に副戶長、町村制施行後は、村會議員、亦郡制後は郡會議員、參事會員等の地方公職にあげられ、獻替の功多かりしが大正九年七十二を以て物故。當主重治氏は、甲府中學校の前身、當時の縣立尋常中學を明治二十九年に卒業し、同三十五年十二月稅務屬となり北都留郡猿橋稅務署に奉職、その後、南都留谷村、南巨摩郡櫛澤、北巨摩郡韮崎等の各稅務

署に歴任、明治四十一年退きて郷土に入り、村會議員として、村治に參與する傍ら家業に精勵、大正五年九月二十一日七保郵便局の設置認可を得てこのかた郵便局長の重責を荷ひ、通信事務を秉掌して温厚なる人物として、衆望を荷負つて今日に至つてゐる。趣味は造園、現に自宅には、廣大なる庭園を有し、近郷その比なしと稱されてゐる。因みに葛江夫人との間に二男七女あり、家庭常に春風に溯り、和氣藹々たる氣に充ち、近隣羨望的となつてゐる。長男を重雄氏と呼び、横濱專門學校に在學中である。

村長

梶原源次郎

北都留郡島田村鶴島

識見、手腕兩つながら兼ね備へ非常時農村の更生を擔任して、健闘の意氣物凄く、村民の渇大なる支持を得てゐる梶原源次郎氏は、慶應三年十月二十七日の出生で、故五兵衛氏の長男である。其の家は鶴島部落草創の舊家で、舊幕時代は名主を勤めた地主である。先代五兵衛氏は、明治八年地租改正の當時、大に活動し、其後十八ケ村聯合組合會議員に擧げられ、尋いで町村制施行と同時に收入役に推され、更に助役に進み、自治の橋籃時代に先驅的貢獻をなした恩人である。源次郎氏は郷里の高等小學校を卒へて、某水戸藩士に師事して漢學を修めた。明治四十五年、東京電燈株式會社に奉職し、精勵恪勤衆に超え、其の事務的才幹は内外の認むる所となり、後本社に勤務を命ぜられ、大正十一年十二月退社に至るまで前後二十ケ年在勤し、頗る重用せられた。歸郷してからは、專ら郷土經營に秉掌し、村會議員四期、村助役二期を歴任して、漸次衆望を收め、遂に非常時の重責を擔任し得る唯一好適の人材として、村長に選任せられ、また村農會長、方面委員、助成會長を兼任し、村民の力强い支持を得て、其の識見手腕を縱横に揮つてゐる。氏は苦雫と號し神歌俳句に堪能である。優雅な反面に、劍道の妙奥に達するといふ豪氣さもある。因に、たか子夫人との間に一男二女がある。

元村長、勲八等

奈良昇作

北都留郡富濱村鳥澤一九一七

古來地方、素封家の子弟は多く怠惰安逸に耽り、祖先傳來の遺産に縋りて敢へて獨力獨行生活を求める事をせず、社會に貢獻する事無くして其の一生を終るの徒が多い事は實に歎きても餘りある事と言ふべきである。この意味より觀察するに我が奈良昇作氏の如きは夙に覇氣旺盛、識見豊富、度量宏大、以て社會に關與して名門の家名を辱かしめざるものがある。祖父醫成氏は名主を勤め　一郷の重鎭と仰がれ、後には戸長をも勤め村長にも在勤して自治村政の運用に善處した斯界の功勞者である。更に先代庄兵衛氏は先年七十三歳を以て他界されたが生前に於ては助役を勤めて産業の振興を圖つたり甲州街道の改修に努力したりした人。現主昇作氏は明治十三年六月三日、庄兵衛氏の長男に生れ、郷黌を卒業して以來獨學、齡二十七歳の時都留税務署に勤務、爾後鰍澤、箱嶽、淀橋、大藏等の各署を經て遂に大藏省に入りて天禀の才能を發揮、大正十三年歸郷し、同十五年本村助役に就任、助役を經て昭和二年村長に推擧されて一村自治を掌握、小學校々舎の增築、校庭の整理、村財政の緊縮整備、産業の振興等に就いた。趣味に讀書がある。令閨はる子氏は温良貞節の譽が高い。

學務委員
元村長、從八位

幡野傳一郎

北都留郡富濱村宮谷

幡野家は富濱村屈指の名門家、幕政の頃は、名主役を命ぜらる。先代市左衛門氏は副戸長として、大小區制時代、相當に活躍せる公人なりしが、八十二の高齡を以て他界。當主傳一郎氏、この名家の長男として、嘉永六年十一月二十三日を以て生まる、寺子屋にて學を修めたる後は、引續き漢學を學ぶ。富濱村の合村するや、副戸長に選ばる。明治十二年には北都留郡役所に入り、二年目に郡書記に進む。爾來明治三十四年まで在任辞して郷に入り、數年を經て村長に擧げられ、村治の圓滿遂行に當る。期滿ちて退き閑地にありしが村政の紊乱起るや、再度推されて村政を秉掌、在任中校舎の增築をはかること、實に前後三回、この外用水上に於ても、永久の策を立て、、鐵管の布設に換へ、貢獻業功、實に枚擧に遑なし。今や高齡その任にあらずとして、顧務委員の現職のみにとゞまりて、一切の公職より去り閑地にあれど、金頭地方産業の進展を計るを忘れず、村政上の元老として、依然異彩を放ち重きを加ふ。イツ子夫人との間に、一男二女あり、二人の子女既に嫁す。長男壽氏、父に似て、現に村會議員等の公職につき村自治界の中堅として活動中である。

信用組合長
村會議員、元村長

小林久式

北都留郡初狩村中初狩

小林家は、舊幕時代、世々庄屋を勤めた土地草創の舊家で、資財も多い。大正五、六年の好況時代に一時機業を起したが、是は失敗して廢した。當主久式氏は、小學校を卒へて、都留高等小學校に入り、更に某私塾に學び、和漢洋の學を兼ねてゐる。穎邁なる氏は、二十歳の頃より郷土經營に參與して非凡な才智を表し、夙に收入役にあげられた。其の後眞摯な不斷の活動は村民の信頼を深め、期せずして其の社會的地位は躍進し、收入役より助役へ、助役より村長へと活躍舞台は發展し、其の手腕また之に伴ふて精彩を加へた。また大正四年衆に先じて信用組合の設立を提唱し、熱心に村民に說いて之を實現し、自ら組合長となつて經營に當り、同組合は是の經濟界の不況にも拘らず、歩一歩と確實な事業の發展を見てゐる。其の他村會議員を永く勤め、また國勢調査員として獻替する所尠くない。實に氏の郷土史上に於ける足跡は顯著にして庶民に與へた福利は多大なものである。尙長男日文君は甲府の細田家の養嗣子となり、都留中學校を卒業して若尾銀行に奉職したが、同行の破産と、もに有信銀行に轉じて今日に至り、將來を囑目されてゐるが、小林家は別子なき爲め、近く復籍することになつてゐる。

元富濱村々長

杉本新重郎

北都留郡富濱村鳥澤二八八

産業更生運動の盛んに唱へられてゐる今日の非常時に、債務調停委員、小作調停委員等其他を兼任自治村政の興隆と精神作興を懸念されてゐる人に我が杉本新重郎氏がある。抑も當家は當地鰥々の舊家で、總本家に當り、始祖以來累世連綿として傳り、先代又市氏は荒物商及び質屋業を經營、地主として德望を滿はれたのであつた。新重郎氏は先代又市氏の長男に當り、安政二年十月十三日に生誕。幼少の頃より寺子屋に通つて勉學に勵み、漢學の研鑽修養に耽り、夙に博識の人として聞へた。齡二十五歳の折り家政の人と爲り、家業に精勵される其の傍ら村會議員を振り出しに幾多の公職に携はり明治二十九年には村民の總意を受けて村長となり、之を村政に反映に當村飲用水の粗惡と不便とを痛感水道を敷設し、或は山道の改修を行ふ等の事績を擧げた。村長引退後も村會議員、學務委員、小作調停委員、債務調停委員、消防組頭等を兼任する事多年に及んだ事も、氏の人と爲りを物語るに足ると謂ふべきであらう。老いて尙矍鑠とは蓋し氏の謂か、頭健そのものゝように健在さる。令閨きり子氏に三男三女がある。長男又一郎氏は現に村會議員として、盛名を馳せて居り、二男杉本次郎氏は東京實業界に勇飛、三男一男氏は分家して農を營み、長女ため子さんは東京に、二女たけ子さんは自宅に、三女は上京して藥劑士たらんとして勉强せられてゐる。

高山醫院々長

高山武士

北都留郡大月町三五三
電　話　六五番

日本の富士と言ふよりも、實に世界の富士として誇るに足る名山を南に眺め、風光明媚の山梨縣は屋々として實る甲州葡萄の産地でもある。斯うした自然の偉大な感化を受けて知らず〳〵の裡に温厚にして寛容な性格を受けた氏は、又稀れに見る明晰な頭腦の所有者

で、其の天才的閃きは小學校から都留中學、高等學校、東北帝國大學醫學部と順次學序を追ふて進む毎に發揮され、昭和四年三月目出度く榮譽の業を終へて、卒業するや更に大學病院及び仙台山川病院に實地に腕を磨き、宮城縣衛生技師となり、昭和六年鄉里に歸り、新しく病院を建設し、同年十月理想的な施設を完備して開業、內科外科其の他一般の診療に當られるも就中、內科と小兒科に於ては縣下に定評を受けた名醫である。氏は明治三十六年六月十日生、先代角太郎氏の長男。生家は近鄉に鳴る名望家で、家系既に連綿たるものがある。實父角太郎氏は別に公職に關與せざるも、公共事業には尠からざる貢獻をした人。篤農家として知られたのであつた。武士氏は人と爲り溫厚禁度廣く、內に溢るゝばかりの溫情を湛え、對者をして自ら尊敬信頼せしめ得る德望を備へてゐる。夫人をきよ子氏と云ひ、長女を恭子孃、次女を敬子孃と言ひ兩孃未だ幼少にして、父妻の溢るゝ慈愛に育くまれてゐる。

（山梨縣北都留郡之都）

元村長、元郡會議員

小俣高次郎

北都留郡巖村四方津

明治廿五年巖村收入役に選任せられてより、助役を二期、村長を二期、郡會議員を三期、同參事會員、村農會長、南北都留郡學校組合會議員、同參事會員、郡農會評議員、郡農會代議員等多くの公職を歷任し、殆んど其の一生を地方開發に捧げて來た、偉大なる時代の先覺者は小俣高次郎氏である。抑々氏は慶應二年十月二日を以て小俣伊衛門氏の長男に生れた。其の家は村屈指の舊家で代々農を營み祖父源平氏は時代の推移流行の變遷を先見して逸早く甲斐絹の機織に轉向し、經營よく業礎を築いた。先代伊衛門氏は其の業を繼いで家門繁榮に努むる一方、村自治に盡瘁し、町村制施行當時は村收入役に推されて好評を博した。高次郎氏は幼少寺子屋に學び、後さる附侶に就いて漢學を修めた。資性穎悟、爲人俊敏にして夙に嚴父の片腕となつて働き、明治二十二年嚴父の收入役となられた際は其の代理として殆んど一切の實務を執り、爾いで同二十五年收入役にあげられ、爾來全生活を傾倒して地方開發に努め、光輝ある存在をなして來た。現在は老齢の故を以て一切の公職から退いてゐるが、依然村民の敬仰をあつめて、據然重きをなしてゐる。因にとよ子夫人との間に一男五女を儲け、長男恒雄氏は實業に就いてゐる。

元村長

野尻英俊

北都留郡賀岡村强瀨四三九

資性溫厚で篤實、頭腦緻密にして算數に通じ、壯にして稅務署に奉職、退いては村政の第一線に立つて活躍した本村自治界の異材、野尻英俊氏は蓋し村內異數の功勞者か。抑も當野尻家は舊家、累世農を以つて生業とし、地方の大立物として地方開發に貢獻した名望ある家柄である。先代は重嘱氏、生前夙に戶長役場當時より戶長となり、明治二十二年町村制施行に際して初代村長となり、本村自治の基礎を築いた功勞者である。先年七十一歲を以て物故された。當主英俊氏は故重嘱氏の長男、明治六年十一月十日を以て生れ、鄉養を卒業後は專ら漢學を修め、猿橋稅務署直稅係として勤務。中央線開發に際して星野玄仲氏の元に笹子トンネルの材料運搬に當ること二年、明治四十三年より東京電燈駒橋發電所に勤務すること約二十ケ年に及んだ。昭和四年より村長に推され、自治に關與、村內の三小學校に高等科設置を斷行する外幾多の事績を擧げたのである。斯くて村會議員たること四期、區長數回兼任、尠からぬ功績を著はした。寔に本村の元老と尊稱すべきである。因に令閨まつ子氏は四男四女の慈母で、長男信行氏は目下八王子實業界に活躍し、二男を玄氏三男を直行氏、四男を美明氏、長女を秀子孃、二女をよし惠孃、三女を益子孃四女を千惠子孃と言ふ。

元村長

平井粂三郎

北都留郡笹子村黑野田一二八三

中央線の開發以來急速の發展を爲しつゝある笹子村に於て、其の特記すべき献替者として令名を馳せ、終始自治を秩序、屢々私財を拋つて各種施設を助け、村長其の他の公職に歷任して斯界に貢献した人に、平井粂三郎氏がある。氏は同地の舊家に生れ、先代故長平氏の長男に當る。生誕年月は明治十年十二月三十日。而かも氏の生家たるや舊幕時代より名門を以て知られ、累代名主の役を勤め、常に鄉民より敬意を表せられた關係上氏の如きも圓滿なる人格、卓越せる識見は早くより認められ、村自治に參畫して寄與する處が多く村民の敬意を一身に聚めた。氏は鄉黨を終へるや家庭の人と爲り、嚴父を輔佐した。長平氏は不幸氏が齡三十歲の時行年五十有餘歲を以て他界されたのである。爾後氏は家業に精勵、大正二年より勤續村會議員であり、收入役、助役を經て村長となり、公有部落財產の統一、學校運動場の擴張、奉安殿の新築等に盡瘁した。而して更に氏は土地賃貸價格調査員を勤め、現に裁判所調停委員、家屋稅調査委員、方面委員、村會議員等に在任中。就中北都留郡木炭同業組合長としては創立以來副組合長を勤め大正十二年組合長となり今日に至る迄地方產業の興隆に盡瘁した寔に同村異數の人材であり、同村に取り必要缺くべからざるの人物である。氏は外に圓滿なる人格を把持する如く、內に入つても亦圓滿な家庭を作り、衆に範を垂れ、令閨ぼう子氏との間に長男準太郎君（明治三十三年生）があり、同君は現に消防小頭會計係を勤む。

元村長、勳七等

藤本倬照

北都留郡大原村小篠

いまは表面の活躍舞台から退いてゐるが、嘗ては鄉土先覺者として教育、自治、產業等文化の發展に寄與した功績は鮮しいものだ。氏は明治三年一月十八日、地主素封家、政照氏の長男に生れた。先代は夙に副戶長として識腕を推稱せられ、明治八年地租改正には大きな足跡を鄉土史上に遺した。其の後村會議員に選出されたが、年五十七にして歿した。倬照氏は明治二十四年山梨縣師範學校を卒業して教育事業に携はり、南都留郡大石村の小學校、鳥澤小學校、大原高等小學校の各校長を歷任し、明治三十七年二月退職した。其の教へ子よりは幾多有能の材を出し今猶ほ氏の人格は讃へられてゐる同年大原村々長に推され、帳簿の整理、滯納稅の整理等を斷行し、事務は從來にない簡捷と進捗を見たが、更に著功として賞すべきは政黨の浸潤に依る黨爭の影を沒したことだ。當時本村は政黨の弊害甚だしく、部落の感情的對立また燃烈であつたが、氏の村長就任後は黨爭の弊は剪除せられ、村民は相互融和して、擧村村勢の進展に邁進した。其の他村農會長、學務委員、郡農會長、郡甲斐絹同業組合長々歷任し、何れも著しい功績をあげた。因に氏は勳七等の有勳者である。

元郡會議員、元村長

井上操

北都留郡賀岡村烏倉四二一

養蠶と葡萄と林業を村民が自己の生命線とする賀岡村に於て、夙に是等產業の向上發展に努力し、克く共存共榮の主旨を徹底せしめて、村自治制の運用に善處すること多年、更に强節小學校々舍の建築等各方面に亙りて事績を擧げた人に我が井上操氏がある。抑も井上家は當地草分けの舊家で、累世地方の一地主として存在したと言ふのみでなく、地方文化の開發に貢献された德望家で、其の生業とする處は農、之を輔けるに機業を副業として數代以前より經營、現主操氏に及んで動力を使用して機業界に盛名を爲してゐる。操氏は明治三年一月二十一日、先代仁右衛門氏の次男に生れ、實兄の上京して實業界に入りし爲、宗家を繼いで現在に及んだ。其の間年若くして村木商に志し、地方は勿論東京横濱方面に販路を擴張し、盛業を續け、明治四十三年より土木建築請負業を創始、駒橋水力電氣會社の工事、八澤水電會社の工事を請負ふて之を完成、更に本郡大月町貯水池の大工事を二十五萬圓、前後四ケ年の日子を費して完成、本村兩小學校々舍、役場の建築等を完成する等斯界に盛名を馳せるに至つた。公職方面には郡會議員同參事會員、村會議員、村長、甲斐絹同業組合南北聯合組合評議員

（山梨縣北都留郡之都）

（二回）等に多年歷任、現に小金澤林道改修組合議員に在任さる。資性溫厚の人、而かも機を見るに敏、趣味を林業とせらる尙令閫やすた氏は二男三女の慈母長男巖君、二男茂君と呼び膝下に在る。三女みよ子嬢は東京の裁縫女學校に在學中。又當主操氏の實弟智三氏及び實弟清春氏は何れも操氏と共に前後して村長となり、鄕閭村の爲めに貢獻されたのであつた。

山梨縣立

都留中學校

校長 從五位勳六等 山中惠敎

北都留郡大月町

本校は明治三十三年四月十七日山梨縣中學校都留分校として開校五月十七日開校式擧行、明治三十四年四月一日山梨縣第一中學校都留分校として開校、明治三十五年七月谷村より大月に移轉、同三十六年四月一日山梨縣第二中學校都留分校と改稱、同三十七年三月三十一日廢校、同治四十三年三月九日縣立都留中學校設置認可、四月十八日明治三十四年四月十七日山梨縣中學校都留分校として開校、明治三十五年七月谷村より大月に移轉、同三十六年四月一日山梨縣第二中學校都留分校と改稱、同三十七年三月三十一日廢校、同治四十三年三月九日縣立都留中學校設置認可、四月十八日授業開始、五月十日開校式春年五月一日を以て學校記念日となす。明治四十五年四月四日皇太子殿下の行啓あり、大正九年五月一日創立十周年記念祝賀式擧行、翌年校訓、校歌制定、九月三日校旗樹立式擧行、大正十一年十月生徒圖書館開設、現在本校は一〇學級、五〇〇名の定員、職員總數二五名。本校に於ては教育勅語の聖旨を奉体し高尙なる人格と忠良なる國民との修養に努力すべし。禮節を旨とし公德を重んじ自治協同の精神を涵養すべし。儉素を尙び奢侈を戒め、質實剛健の氣風を振起すべし。忍耐學に勵み、克己業に務め、自學進取の態度を發揮すべし。衛生に注意し、身体を鍛錬し、以て大成の基礎を確立すべしの校訓の實行を先とし、質實剛健思想健實の美風を振作し、殊に武道教練、作業に努力するを教育方針となし、中堅忠良人材の育成に向つて鋭意努力中である。

校長 山中惠敎 ― 山中校長は大阪府三島郡春日村の出身、明治十七年三月二十三日の出生、明治四十年三月東京高等師範學校卒業、鹿兒島、熊本、奈良の各縣中等學校に奉職、大正十五年一月德島縣立海部中學校長に榮轉、昭和五年十一月甲府高等女學校長として本縣入りとなり、昭和七年三月本校々長に榮轉、現に從五位勳六等、高等官三等待遇として本縣中等教育界に重きをなす。

山梨縣立

都留高等女學校

校長 從六位 大武美德

北都留郡大月町

本校は大正十二年二月十七日山梨縣立第四高等女學校として設立認可、四月四日廣里東小學校の一部を假用して授業開始、翌年四月一日校舍本館竣工移轉、大正十三年四月十八日山梨縣立都留高等女學校と改稱、昭和二年三月十五日第一回の卒業生を世に出だす。昭和三年二月二十三日生徒定員四百名、七月十六日勅語謄本拜戴、現在八學級、三三三名の在籍生徒あり。現在設備は敷地五、三六一坪建坪五九八坪、運動場坪數二、二六六坪、寄宿舍建坪一一五坪、其他建坪一五〇坪たり。歷代校長は創立當初中山正明氏本校々長に就任、昭和六年中山校長退職、渡邊英太郎氏代つて學校長に就任、翌年三月渡邊校長辭し、視學官伊藤實將氏本校々長に任命さる。昭和七年四月二十日伊藤氏退き大武美德氏本校々長たり。本校に於ては非常時日本に處する、良妻賢母の育成を以て教育方針となし、生徒の自覺的自習と献身的なる教職員の活動とに依り、目的貫徹に努力中である。

校長 大武美德 ― 福山市の人で、明治二十六年六月四日出生、大正十三年三月東京高等師範學校專攻科を卒え、大阪府天王寺師範、池田師範等に教鞭を採り大阪市視學に榮進、その後本縣女子師範に迎へられ、再び教壇の人となり昭和七年四月本校々長に拔擢され就任、爾來教育に關する勅語の御趣旨に則り、しかも清く正しく强い女性の教養を方針として進み、名校長として好評嘖々たるものがあり、その識見の豐富なる人の驚嘆する所である、眞に從六位に叙せられ、今日に及んでゐる。

大月東尋常高等小學校

校長 正八位 淺川重制

北都留郡大月町

明治四十四年四月一日大橋、花咲の兩尋常小學校を廢止して、廣里尋常小學校を創立せるに創る。九月校舍新築、廣里東小學校と改稱、十月花咲分教場設置、大正三年高等科を併置、廣里東尋常高等小學校と改稱、同十五年校舍增築昭和八年四月一日町制施行と同時に大月東尋常高等小學校に改めらる。現學級數一六、在籍兒童八四一名にして職員校長以下一六名、外に學校醫二名、本校に於ては教育勅語の御趣旨を奉體して、兒童各個の發展を圖ると共に國家社會の要求する人材育成に努力し、延ひては鄕土の實情に適應する國民として育て、將來國家にとつては忠良なる國民であり、鄕土にありては中堅人材として、本町の重責を荷負ふ人たらしめんと欲するはこれその教育の大方針とするの所である。今や町制も施行され益々多難なる前途を有する本町にありて、本校の教育方針は一般から期待をよせられてゐる。

校長 淺川重制 ― 校長淺川氏は明治二十年三月四日北巨摩郡大泉村に出生、明治四十一年本縣師範學校を卒業、爾來縣下初等教育界に活動、之く所非凡の才腕を發揮し好評嘖々、大正十四年十二月本校々長に簡拔就任、よき教育指導者を得たりとして、校內外の信望を篤くして今日に至つてゐる。

學務委員

渡瀨源之助

北都留郡富濱村

人望は金で得られるものでなければ、權勢で得られるものでもない。共はそれの人の德望が然らしむるものである。夙に他縣から當村に來住し篤志家として社會各方面に活躍貢獻し、善根功德を積んで各方面から慈父の如く、一世の木鐸者の如く尊敬せられてゐる人に我が渡瀨源之助氏がある。氏の家業は米穀商及び雜貨商であるが其の營業方針の如きも、敢へて營利主義に流れず、薄利多賣主義を以てし、人を利し、世を利し、最後に自己の生計を立つに足りれば以て足れりとしてゐる等渡瀨源之助氏の面貌を此處にも躍如として見出すものである。氏は又各方面に盡す處多く、永年學務委員としても貢獻し、教育方面にも盡瘁した其の功績は蓋し僅少ならざるものがあつた。古諺に桃李言はざれども、下自ら蹊をなす。氏の人格を敢へて讃美宣傳するにあらざるも人亦之を知るで、其の商業上に於ける繁昌の如き、學務委員として私事を拋つて公共に盡す等の如き氏の人と爲りを物語るものと言ふべきであらう。氏は天性溫厚にして勤勉、更に謙讓の美德を備へ功あれば人に讓り、失敗あれば自ら責任を負ふと言ふ君子仁である因に氏は慶應三年八月十八日生れ令閫のぶ子夫人は內助の功多く、長男貫一郎氏は自宅にありて家業に精勵せられてゐる。

元恩賜林組合長、元村長

鈴木高之助

北都留郡七保村葛野

多年村長、助役、學務委員、農會長、恩賜林組合長等の公職に歷任せられて村治の向上發展に辣腕せらた人に鈴木高之助氏がある。抑も當鈴木家は當村屈指の舊家で草分けの祖とも稱してよく、昔は名主を勤め、姓を小山と言ひ、岩殿城主在世の砌り、改稱して鈴木と改め、先代まで累代の當主は襲名して作左衛門と稱したのである特に家門の貴く古きは四十有餘の分家があり、世人稱して大藤と言ふ。先代は漢籍の學に深く通曉した人で、私塾を開いて庶民教育を行つたと言ふ。現主高之助翁は安政三年三月十日、先代の長男に生れ、幼少の頃より嚴父の膝下に在りて學を修め、二十有五歲の時家政の人となり、公職としては組伍長を振り出しに、氏子總代、區長其の他前記の職に歷任して、道路の改修、校舍の新築、其の他恩賜林拂下其の他各方面に其の業績を遺したのであつた。翁現に壯者も凌ぐ矍鑠振り、令閫そう氏は長男隆丸氏の慈母、隆丸氏は中學を中途退學後、近衛師團に入營、曹長として滿期除隊、爾來分會長として十五年、消防組頭を十五年、郡聯合分會長を十年に亘りて勤め、

各本部より有力者として表彰を受けた其の業は金融業、趣味は遊藝劇を愛好せらる。

富濱村

郡町村長會長
村長　鈴木勇次郎
北都留郡富濱村

「甲州街道鳥澤の宿」の氣分濃厚な富濱村は、東に梁川、西南に大原西北に七保、東北に大目、甲東を控へて、鳥澤、宮谷の二驛が集團的に宿場をなし、戸數七〇〇戸人口五、一六三人の村民の生業は農業の單一だ。が併し、耕地は僅に田が一四町歩、畑二四七町歩で村民の多くは米の喰えない矛盾を多分にも味ひ、年々莫大の移入米を養蠶收入から補つてゐる。其の養蠶收入とても、春夏秋蠶を通じて、僅に五萬圓内外に過ぎない。從つて村經濟の苦境も想像に餘りあるものがあり、先年自力更生指定村として、第一に納稅組合を組織して、あらゆる更生策に努めてゐる。寺久保區にある石森山圓福寺は明德三年の創建、武田刑部大輔の開基である。尙ほ歷代村長は井上久一郎、小幡錄一郎、藤本光三郎、杉本仙太郎、石井角太郎、小幡錄一郎、小坂階起、佐々木廣太郎、石井助左衛門、坂本昇平、幡野傳一郎、安藤熊太郎、杉本新十郎、藤本金次郎、藤本健次郎、安藤郁一、石井行雄、幡野傳一郎石井武志、奈良昇作、鈴木勇次郎（現任）の諸氏である。

村長　鈴木勇次郎——氏は慶應元年十二月九日出生。二十五歲の時、絹糸貿易屑物商を開始し、爾來半生を傾注して成功し、また運送店をも兼營してゐる。夙に鄕土經營に參加し、現に村長たる外、村農會長、郡町村長會長、民政黨山梨支部理事を兼ね、また會では村會議員、郡會議員、郡參事會員を歷任した。因に長男唯一氏は東京市淀橋區の土木請負業者助役、町長、府會議員、區會議員等に推された人材だ。

昭和九年九月十二日　納本
昭和九年九月十五日　發行

自治大成（奥附）

編輯發行兼印刷人　東京市小石川區原町十六番地　吉岡基

發行所　東京市小石川區原町十六番地　帝國聯合通信社

印刷所　東京市板橋區板橋町一丁目二四八〇　帝國聯合通信社印刷部

不許複製

發兌　東京小石川　帝國聯合通信社

[illegible]

[illegible]

[illegible]